福祉新聞（５月２３日）

三念帖

3月11日の東日本大震災当日、宮城県南三陸町の総合式場「高野会館」では、志津川地域の老人クラブによる「芸能大会」が開かれていた。20クラブから500人が参加。壇上で、会員らが歌や踊りなどを披露する最中、大きな揺れが襲った▼「津波が来る」と廻館地区会長の鈴木豊太郎さんは感じた。しかし、海沿いの会館から高台までは遠い。会館職員の誘導に従い、最上階の4階へ。そこは、トイレに人があふれるほどすし詰め状態だったという▼やがて日が暮れ、場の空気も重くなる。「死ぬ時は皆一緒だ。頑張れ」。会長として一晩中立ったまま、周りの人たちを励まし続けたという。結局、会館での被害者はゼロ。今は家族と避難所で暮らしており「大会がなければ、高齢者の犠牲者は増えただろう」と振り返る▼未曾有の災害は被害が広範囲すぎて、こうした話がいくつも眠っている。日々の報道では被災地の話題が減少傾向にある。阪神淡路大震災後は、地下鉄サリン事件が起き、世の関心は一気に移った。それで世間に見放された気になる被災者もいたという。今回は原発で、同じ轍を踏みはしないか▼宮城県が4月に示した復興基本方針の素案は「一人ひとりが復興の主体」などを理念に掲げる。単なる復旧ではなく、10年計画で県民生活の在り方を様々な面から再構築するという▼方針は8月に決まるが、どこまで被災者の気持ちに寄り添えるだろうか。それぞれが異なる物語を持っている。73歳の鈴木さんには、鈴木さんなりの家族観や死生観、郷土への思いがある。「ヒサイシャ」と一般化されることに抵抗を覚える人も中にはいるはずだ。

▼「寝れば広きわが胸を打つ野の薫風」（香西照雄）